

思考と技術  
と対話の  
学校





Tokyo Art Research Lab  
思考と技術と対話の学校  
基礎プログラムアニュアルレポート

02 現場に立つ受講生の姿 森司

---

04 思考と技術と対話の学校とは  
基礎プログラム 思考編 技術編 対話編

---

08 思考編(2016年度)

10 1年の流れ

16 通年課題

---

18 技術編(2016年度)

20 1年の流れ

24 通年課題

---

26 対話編(2016年度)

28 1年の流れ

32 イベントレポート

---

34 受講生インタビュー

36 3年間の学びを終えて 坂本有理

38 Tokyo Art Research Lab WEB

39 図書室

## 現場に立つ受講生の姿

### 3年目の「基礎プログラム」

3年目の「基礎プログラム」も無事に終わり、思考編、技術編、対話編それぞれ修了証の授与も終わりました。3年間かけてすべてのプログラムを修了した人から、1年目を終えて一息ついている人もいることでしょう。

思考編の「仕事を知る」では今年も多彩な仕事人たちと出会い、「思考を深める／想像を広げる」ための6回の講義内容も多岐にわたりました。そのどちらもが今年も編集された「講義録」を通じて追体験できます。

リオデジャネイロオリンピック開催時に現地で展開した文化プログラムの準備に追われ、講義を例年になく聞き逃した自分は、講義録の内容から思考編が取り上げた講義内容を知ると同時に、演題や通年課題のプログラムを組んだスクールマネージャーたちの工夫を見ることができました。

技術編では「企画をかたちにする」を軸に、プロジェクトとして具体的に組み上げていく技術を通年で学びました。その講義のエッセンスが、スクールマネージャーたちの共著『アートプロジェクトの現場で使える27の技術』として、アートプロジェクトをはじめのための技術をまとめた教本となりました。

「はじめる・うごかす・ふかめる・のこす」の章立てからなる本書は、3年ぶりに刊行した通称『ことば本(東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本(増補版))』に示した心得を具体的に「かたちにする」ための副読本として、積極的に活用したい内容となっています。

そしてはじめて開講した対話編では、事業を実践しました。現場を「動かす」ことを

学び、ゲスト講師としてアーティスト・ユニットNadegata Instant Partyを迎え、実践に向けて活動しました。最終的には1年の流れにあるような行程を経て「プレイパーク・パーティーを考える日」を開催。その後、実践プログラムドキュメントを一冊にまとめる行為を通じて、経験や気づきを言葉に残しました。

「思考」と「技術」と「対話」の3つの基礎プログラムの受講生は、受講日だけではなく、課題に取り組み、受講生間で密に連絡を取り合いながら学び合いました。それは、相互に影響し合い、それぞれの学びを深化させて身体化する時間となりました。とはいえ、アートプロジェクトの実施は、傍目で見るとより簡単ではなく、それ以上に企画を組み立てるのも容易くありません。

プロジェクトにまつわる実務のあれやこれやを学ぶかたわら、国内各地で開催されているアートプロジェクトの現場に足繁く通い、鑑賞や参加体験を超えて、その背景にある企画者や作家たちの想いやこだわりを見る楽しみを手にする受講生も現れました。現場に独自の関わり方で関与する受講生やNPOで活躍する人も出てきています。

アートとの関わりを持った受講生が、多くの現場で担い手としてそこにいる。そんな姿に出会える機会が増えることを楽しみにしています。

### 3年目の「基礎プログラム」

### 3年目の「基礎プログラム」

### 3年目の「基礎プログラム」

### 3年目の「基礎プログラム」

### 3年目の「基礎プログラム」

### 3年目の「基礎プログラム」

森司

「思考と技術と対話の学校」校長

# 思考と技術と対話を 「身体化」する学校



アートプロジェクトは、時代の要請を反映し、可視化するものです。

少子高齢化を筆頭に、様々な価値観や社会構造の変化が起きているなかで、

いままさに社会に対する応答力が求められています。

そのようなアートプロジェクトを動かす人材に必要なのは「思考」「技術」「対話」の力だと考えます。

学びはすぐに手に入るものではなく、意識的に時間をかける、

つまり「問いを抱えたまま過ごす」ことが大切です。

来たるべき時代に必要なアートプロジェクトを考え、かたちにするために。

「思考と技術と対話の学校」は、アートプロジェクトを動かす力を「身体化」する学校です。

本校の「基礎プログラム」では、3つの基礎力（「思考」「技術」「対話」）を養うことを目指します。

「思考編」では、第一線で活躍するアートマネージャーに出会い、

アートプロジェクトが手がけることのできる領域イメージを拡張する考え方を学びます。

「技術編」では、マネジメントの実務能力をスキルアップ。

プロジェクトの始まりから終わりまでのワークフローを学び、

業務の必要性を理解した上で、現場で求められる技術と向き合います。

「対話編」では、多様な人々と対話を重ねながら

実際にアートプロジェクトの企画・運営を行うことで、実践を通してこれまでの学びを検証します。

学びを深める「基礎プログラム」の仕組みと特徴

## 1 講師100名との出会い

P.10 P.20 P.28

第一線で活躍するアートマネージャーやアーティスト、多彩な分野の研究者が、現場の生の声を届けます。3つの基礎プログラムを通して、約100名の講師陣との出会いは、大きな財産となるはずです。

## 2 スクールマネージャーによるサポート

P.9 P.19 P.27

現場経験豊かなスクールマネージャーが、各グループを受け持つ担任制。受講生の日々の学びに伴走します。

### 個人面談

1年間の到達目標や、今後のキャリアプランなどについて話し合う。

### コーディネート

希望者に対して、アートプロジェクトの現場見学やボランティアなどをマッチング。

### フィードバック

課題の授業レポートへのコメントや、予習・復習でのフォローなど随時対応。

### 情報提供

講師情報や旬なアートプロジェクト情報などを共有。

## 3 多様な仲間との学び合い

P.16 P.24 P.32 P.34

クラスには、職業や年齢、現場経験など様々なバックグラウンドを持つ受講生が集まります。グループワークを通して、その違いを実感し、ともに学び合う場が生まれます。

## 4 アートプロジェクトの図書室

P.38 P.39

教室とWEBには、TARL (Tokyo Art Research Lab)が研究・開発してきた教材やアートプロジェクトの関連本が納められています。ドキュメントブックやノウハウの詰まったマニュアル、評価にまつわるものなど多岐にわたる内容。いつでも図書室として、知財を活用することができます。

# 3つの基礎プログラム

アートプロジェクトを動かす人材に必要な3つの力を育むプログラムです。

## [平成28年度実施概要]

**日程** 平成28年6月～平成29年1月  
隔週土曜または日曜開催  
(午前の部 10:15～13:00、午後の部 14:00～17:30で構成)

**対象** **思考編**：アートプロジェクトの運営に関わっている人、関わる意思のある人  
**技術編**：思考編修了生、またはアートプロジェクト運営経験者  
**対話編**：思考編または技術編修了生、またはアートプロジェクト経験者

**募集人数** 思考編30名/技術編20名/対話編15名  
**受講形式** 通年(原則全日参加)  
**会場** アーツカウンシル東京R00M302  
(東京都千代田区外神田6-11-14  
3331 Arts Chiyoda3F)  
**受講料** 一般60,000円/学生40,000円  
**主催** アーツカウンシル東京  
(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
**企画協力** 一般社団法人ノマドプロダクション

## 1

### 思考編

#### アートプロジェクトを動かすための 考える力を養う

「思考」は、社会動向を見据え、どのようなプロジェクトが必要か、また、そのために必要なオペレーティングシステム(OS)を考える能力のこと。授業や課題を通して、「なぜアートプロジェクトを行うのか?」「社会的な課題に対してどのようにアプローチするのか?」「自分はどのように関わりたいか?」など、問いを立てながら学んでいきます。

#### 知る

- アートの知識とアートプロジェクトのイメージ
- 社会を捉える視点(地域、コミュニティ、多様性、身体、食、仕事など)
- 情報のインプットとアウトプットの仕方
- 現場の仕事(事務局、アートプロジェクトを支える人々、作品のインストール、他分野との連携など)

#### 考える

- 私は、なぜアートプロジェクトをやろうとしているのか?
- 私は、どのようにアートプロジェクトと関わるのか?
- 社会における私の興味・関心や問題意識はどこにあるのか?

#### 対応プログラム

- 👁️ = 仕事を知る
- 💡 = 思考を深める  
想像を広げる

構想する

「事業計画書」をつくる

事業を実施する

## 2

### 技術編

#### 企画をかたちにするための スキルを知る

「技術」は、会議の設定の仕方からプロジェクトの現場の仕切り方といった実務、記録をアーカイブ化し未来へ発信すること、また評価までのマネジメントフローなど、様々な局面で必要とされる事柄を遂行する能力のこと。  
レクチャーを通して様々な技術に出会いながら、現場で求められる技術について考えます。またグループワークや課題に取り組みながら、自分たちなりのやり方を見い出していきます。

#### 知る

- 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価など)
- 現場の実務(書類の読み方、事業計画書[企画書・予算書・体制表・スケジュール]のつくり方、共通言語の獲得の仕方、リサーチ手法、会議の仕方、調整の仕方、協働作業の進め方、プレゼンテーションのやり方など)

#### 考える

- 私は、チームでどのような役割を担うのか?
- 私たちは、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか?
- 私たちは、誰とどのようにアートプロジェクトを行うのか?

#### かたちにする

- 運営体制(組織の位置づけ確認、役割分担、進行管理、調整、交渉など)
- 企画(事業計画書作成)

#### 対応プログラム

- 🏗️ = 企画をかたちにする

## 3

### 対話編

#### チームでプロジェクトを 実施するための対話力を磨く

「対話」は、「思考」「技術」を鍛えるための必須能力。プロジェクトの情報を共有し、様々な立場の人と協働し、新たな展開を切り開くための力です。  
実際にアートプロジェクトの企画・運営を通して、プロジェクトを実現させるために調整や交渉など対話力を磨きます。

#### 知る

- アートを捉える視点(美術史、哲学、社会学、科学など)
- アーティスト(思考、作品)
- アートプロジェクトを取り巻く環境
- アートプロジェクトが直面する課題
- 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価、リスクアセスメント、危機管理、雇用問題、法律、インターン・ボランティアマネジメントなど)

#### 考える

- 私は、いまどのようなアートプロジェクトをかたちにしたいのか?
- 私は、どのような技術を強みにアートプロジェクトと関わるのか?
- 私たちは、どのような場でアートプロジェクトを行うのか?
- 私たちは、誰とともに、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか?
- 私たちは、アートプロジェクトにおいて何に挑戦するのか?

#### かたちにする

- 運営体制(プロジェクトの設定・位置づけ確認、情報共有の徹底、共通言語の獲得、座組み設計、ネットワークなど)
- 企画(事業実施計画書作成)

#### 動かす

- 準備(プレインストーミング、情報収集・リサーチ)
- 運営(事務局、進行管理、会場手配、許認可申請、リスクマネジメントなど)
- 広報・PR、プレゼンテーション
- 記録・アーカイブ、ふりかえり、報告・検証・評価

# 思考編

アートやアートプロジェクトに対する固定観念を揺さぶり、現場の仕事や社会との関わりについて考えます。講師とともに学ぶ受講生の多様な価値観や個人史に触れ、多角的に物事を捉えながら、アートプロジェクトを自分ごととして考えていく種を掴みます。



## 知る

- アートの知識とアートプロジェクトのイメージ
- 社会を捉える視点(地域、コミュニティ、多様性、身体、食、仕事など)
- 情報のインプットとアウトプットの仕方
- 現場の仕事(事務局、アートプロジェクトを支える人々、作品のインストール、他分野との連携など)

## 考える

- 私は、なぜアートプロジェクトをやろうとしているのか?
- 私は、どのようにアートプロジェクトと関わるのか?
- 社会における私の興味・関心や問題意識はどこにあるのか?

## 学びのサイクル〈思考編〉

# 365日の学び

アートプロジェクトについて考えるためには、まずはそこに関わる人や仕事を知り、想像力を広げることが必要です。思考編では、学校での1日を軸に、予習・復習などの課題を通して日々のなかで学ぶ習慣を養います。こうした年間を通じた「学びのサイクル」は、技術編・対話編でも基本となる枠組みです。



授業毎 | 午前の部400字以内／午後の部800字以内の授業レポート

通年 | グループワークによる企画書作成&プレゼンテーション

## スクールマネージャーのサポート

- 予習のための情報提供
- 授業のポイントを伝える
- 授業後は、受講生と内容をふりかえり、問いや疑問に応答
- 授業で語られた重要な言葉をワードリストにまとめて共有
- 課題レポートへコメントをすることで復習をサポート
- アートプロジェクトの現場の紹介
- キャリアプランについての相談対応



# 2016.6.18

AM

## ガイダンス

- 開講に向けて
- 受講生、スクールマネージャー自己紹介
- プログラムについて

PM

## 合同プログラム+交流会

### 基礎プログラムについて

GUEST

### Nadegata Instant Party (NIP)

[中崎透+山城大督+野田智子]



美術家中崎透と山城大督、アートマネージャーの野田智子ら3人によるアーティスト・ユニット。2006年より活動を開始。地域コミュニティにコミットし、その場所において最適な「口実」を立ち上げることから作品制作を始める。口実化した目的を達成するために、多くの参加者を巻き込みながら、ひとつの出来事を「現実」としてつくりあげていく。

### アートプロジェクトを科学する

GUEST

### 椿昇 Noboru Tsubaki

[コンテンツポララー・アーティスト]



1989年アゲインスト・ネチャー展、1993年ベネチア・ビエンナーレ、2001年横浜トリエンナーレに出品。2003年水戸芸術館、2009年京都国立近代美術館で個展。2013年より瀬戸内芸術祭「醬の郷+坂手港プロジェクト」ディレクターを務めるなど、アートプロジェクトを持続可能社会実現のイノベーションツールと位置づけている。

HOST

### 森司 Tsukasa Mori

[Tokyo Art Research Lab ディレクター/  
「思考と技術対話の学校」校長/  
東京アートポイント計画ディレクター]



1960年愛知県生まれ。公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。NPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。Art Support Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)、リーディングプロジェクトディレクターも務める。

# 7.2

AM

## アートプロジェクト概論 1

### 「アートプロジェクト」とは何か

LECTURER

### 佐藤李青 Risei Sato

[スクールマネージャー]



PM

## アートプロジェクト概論 2

### 情報収集力を身につける

LECTURER

### 橋本誠 Makoto Hashimoto

[スクールマネージャー]



## グループワーク 1

### 30年後の東京を見据えて、3年間のプロジェクトを考える (ブレインストーミング)

# 7.16

AM

## 仕事を知る 1

### アートNPO事務局の仕事——行政、市民、場をつなぐ

LECTURER

### 宮下美穂 Miho Miyashita

[NPO法人アートフル・アクション 事務局長]



2011年から小金井アートフル・アクション!の事業運営に携わる。事業の多くは、スタッフとして市民、インターン、行政担当者、近隣大学の学生や教員などの多様な方たちの参加によって成り立っている。多様な表現活動が折り重なり、洗練されていく可能性を日々感じている。

HOST

### 阿比留ひろみ Hiromi Abiru

[スクールマネージャー]



PM

## 思考を深める/想像を広げる 1

### アジアを巡るオルタナティブな実践——表現と拠点/コレクティブの未来

LECTURER

### 岩井優 Masaru Iwai

[美術家]



1975年京都生まれ。2009年東京藝術大学美術研究科後期博士課程修了。清掃や浄化をキーワードに映像、パフォーマンス、インスタレーションなどを発表。主な展覧会に「習慣のとりこ」(秋田公立美術大学、2015~2016)、ホイットニー美術館ISPプログラム「メンテナンス・リクワイアード」(NY、2013)、六本木アートナイト(東京、2013)など。

GUEST

### 江上賢一郎 Kenichiro Egami

[アート・アクティビズム研究/写真家]



1980年福岡県生まれ。早稲田大学、ロンドン大学ゴールドスミス校 文化人類学修士課程修了。ドローイング・写真制作、アジア圏を中心としたオルタナティブスペースのサーチとネットワークづくりを行っている。共訳書にデヴィッド・グレーバー『デモクラシー・プロジェクト』(航思社)。

MODERATOR

### 小川希 Nozomu Ogawa

[TERATOTERA ディレクター/  
Art Center Ongoing 代表]



2002年から2006年にわたり、東京や横浜の各所を舞台にOngoingを企画、開催。その独自の公募・互選システムにより形成した若手アーティストネットワークを基盤に、文化の新しい試みを恒常的に実践し発信する場を目指して、2008年より東京・吉祥寺で芸術複合施設 Art Center Ongoingを運営している。

# 8.6

AM

## 仕事を知る 2

### コミュニティアートの実践例

GUEST

### 藤原ちから Chikara Fujiwara

[批評家、編集者、BricolaQ主宰]



1977年高知市生まれ、横浜在住。出版社・フリーランスの編集者を経て、現在は批評家として活動し、ウェブサイト『演劇最強論-ing』を共同運営。本牧アートプロジェクト2015プログラムディレクターなど、様々な方たちとアーティストたちと仕事をしている。自身の創作活動として遊歩型ツアープロジェクト「演劇クエスト」を国内外の各地で展開。

HOST

### 野崎美樹 Miki Nozaki

[スクールマネージャー]



PM

## 思考を深める/想像を広げる 2

### 場所の感覚——場から生み出すプロジェクト

GUEST

### 遠山昇司 Shoji Toyama

[映画監督/プロデューサー]



早稲田大学大学院国際情報通信研究科修士課程修了。初の長編映画『NOT LONG, AT NIGHT』(2012)が第25回東京国際映画祭にノミネート。『マジックユートピア』『冬の蝶』(2016)は、海外の映画祭にてグランプリを受賞するなど高い評価を得ている。映画制作を行いながら、アートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」などを手がける。

GUEST

### 松田法子 Noriko Matsuda

[建築史・都市史研究者/  
京都府立大学専任講師]



民家・まち並みから大都市・集落まで、建築と集住体のフィールドワークを幅広く行う。近年は地形・地質・水系などと地域史を融合させた広域なエリアスタディにも取り組む。芸術分野と連携したプロジェクトに、「地-質からみる神戸」(2013 / KIITO)、「地-質からみるさいたま」(2015~2016 / さいたまトリエンナーレ)など。

MODERATOR

### 芹沢高志 Takashi Serizawa

[P3 art and environment  
統括ディレクター]



1951年東京生まれ。1989年にP3を開設。1999年までは東長寺をベースに、その後は場所を特定せず様々なアート、環境関係のプロジェクトを展開している。横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府「混浴温泉世界」総合ディレクター、デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)センター長、さいたまトリエンナーレ2016ディレクターなどを務める。

## 9.3

## アートプロジェクト概論 3

AM

「おかね」と「しくみ」のはなし

LECTURER

佐藤 李青 Risei Sato  
[スクールマネージャー]

## ロールプレイングディベート

アートプロジェクト推進と反対

## 思考を深める / 想像を広げる 3

PM

生と死をめぐる表現——  
イメージ、ことば、ふるまい

GUEST

金菱 清 Kiyoshi Kanebishi  
[東北学院大学  
教養学部地域構想学科教授、  
博士[社会学]]

1975年大阪府生まれ。関西学院大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学。東北学院大学教養学部専任講師、准教授を経て、2014年より現職。専門は社会学・災害社会学。東日本大震災関連の著書に『震災メモリー—第二の津波に抗して』（新曜社）、『震災学入門—死生観からの社会構想』（ちくま新書）など。

GUEST

菅原 直樹 Naoki Sugawara  
[俳優 / 介護福祉士 /  
奈良町アート・デザイン・ディレクター]

「老いと演劇」OiBokkeShi主宰。青年団に俳優として所属。小劇場を中心に新進劇作家・演出家の作品に多数出演。2010年より特別養護老人ホームの介護職員として働く。介護と演劇の相性の良さを実感し、地域における介護と演劇の新しいあり方を模索している。2014年より「老いと演劇のワークショップ」を全国各地で展開。

MODERATOR

石幡 愛 Ai Ishihata  
[としまアートステーション構想事務局長 /  
一般社団法人オノコロ]

1984年福島県生まれ。2014年東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。「遊びと余白」をテーマにフィールドワークを実施。また、プロジェクト評価に関心があり、プロジェクトの進行過程そのものに評価的な視点や手法を埋め込む方法を探っている。2014年から2017年3月まで、としまアートステーション構想事務局長。

## 9.24

## 仕事を知る 3

AM

アートとまちづくりなど  
広報の仕事

GUEST

立石 沙織 Saori Tateishi  
[認定NPO法人黄金町エリア  
マネジメントセンター 広報]

1985年静岡県生まれ。静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科卒業。ギャラリー勤務などを経て「黄金町バザール2011」でコーディネーター担当スタッフとして勤務。2012年～2014年「日和アートセンター（宮城県石巻市）」アートプログラムコーディネーター。2014年よりNPO法人黄金町エリアマネジメントセンター広報。

HOST

野崎 美樹 Miki Nozaki  
[スクールマネージャー]

## 現場に出会う

黄金町バザール スタジオツアー

## グループワーク 2

PM

30年後の東京を見据えて、  
3年間のプロジェクトを考える  
(中間発表)

## 10.8

## 仕事を知る 4

AM

立ち上げから評価・検証までを  
見据えたプロジェクト運営

GUEST

小林 瑠音 Rune Kobayashi  
[文化政策研究者 /  
神戸大学大学院博士後期課程]

英国ウォリック大学大学院ヨーロッパ文化政策・経営専攻修士課程修了。「おおさかカンヴァス推進事業」現場マネージャーを経て、2015年度まで應典院にてアートディレクターを務める。劇場型仏教寺院にて現代美術の展覧会や子どもとアートをつなぐプログラムの企画・運営等を行う。

LECTURER

佐藤 李青 Risei Sato  
[スクールマネージャー]

## グループワーク 3

PM

30年後の東京を見据えて、  
3年間のプロジェクトを考える  
(課題準備)

## 10.29

## 仕事を知る 5

AM

展覧会・芸術祭運営の現場を  
生き抜くためのスキルとは

GUEST

細川 麻沙美 Asami Hosokawa  
[プロジェクト・コーディネーター]

1977年東京生まれ。テレビ局での展覧会制作・運営などを経て、2008年からは企画・展示業務を中心にフェスティバル事務局に就任。2013年に独立。これまでに「文化庁メディア芸術祭」(2008～)、「モノマチ」(2013～)、「札幌国際芸術祭」(2014～)、「スペクトラム—いまを見つめ未来を探す」(2015)等に関わる。

HOST

家入 健生 Kensei Ieiri  
[スクールマネージャー]

## 思考を深める / 想像を広げる 4

PM

公共空間をつくる / つかう——  
公と私のあいだの場所

GUEST

アサダ ワタル Wataru Asada  
[文化活動家・アーティスト]

1979年大阪生まれ。「表現による謎の世直し」をテーマに、言葉や音楽の創作、アートプロジェクトの企画演出、著述出版に勤しむ。博士(学術、滋賀県立大学)。著書に『住み開き家から始めるコミュニティ』(筑摩書房)など多数。サウンドメディアプロジェクト「SjQ/SjQ++」ドラマ担当。大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。

GUEST

小野田 泰明 Yasuaki Onoda  
[東北大学大学院 都市・建築学専攻 教授 /  
同 災害科学国際研究所 教授]

1963年金沢市生まれ。建築のソフトとハードを繋ぐ「建築計画者」として、せんだいメディアテーク、横須賀美術館などに参画。阿部仁史らと共同で、くまもとアートポリス・苓北町民ホール(2003)、東北大学荻ホール(2008)を設計。東日本大震災発災後は復興事業に注力。著作に『プレ・デザインの思想—建築計画実践の11箇条』など(TOTO出版、2013)。

MODERATOR

佐藤 慎也 Shinya Satoh  
[日本大学教授 / 建築家]

1968年東京生まれ。建築に留まらず、美術、演劇作品制作にも参加。「個室都市 東京」ツアー制作協力(高山明演出、2009)、3331 Arts Chiyoda改修設計(2010)、「としまアートステーション構想」策定メンバー(2011～2017)、「←」プロジェクト構造設計(長島確+やじるしのチーム、さいたまトリエンナーレ2016)など。

## 11.19

## 仕事を知る 6

AM

アートプロジェクトでの  
地域との関わり方

GUEST

**林暁甫** Akio Hayashi  
[NPO法人inVisible  
マネージング・ディレクター]



立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部卒業。NPO法人BEPPEU PROJECTにてアートプロジェクトの企画運営に携わり、2015年NPO法人inVisibleを設立し現職。Relight Project運営事務局(2014～)、鳥取藝住祭総合ディレクター(2014、2015)、六本木アートナイトプログラムディレクター(2014～)。

HOST

**家入健生** Kensei Ieiri  
[スクールマネージャー]

## 思考を深める / 想像を広げる 5

PM

音 / 音楽のバックグラウンド——  
芸術のなりかた / つくりかた

GUEST

**朝比奈尚行**  
Naoyuki Asahina  
[音楽家 / 演出家 / 俳優]



1948年生まれ。演劇系短大を卒業後インディペンデントの俳優として映像や舞台、ラジオで活躍。1985年、音楽・ダンス・演劇・映像・美術などを融合させた非物語演劇を製作する劇団「時々自動」を創設。全作品で構成・演出・出演を務める。時々自動以外でも、音楽家、俳優として活動。

GUEST

**渡辺裕** Hiroshi Watanabe  
[聴覚文化論・音楽社会史 /  
東京大学教授]



1953年千葉県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。博士(文学)。文化としての音楽に関心があり、専門として「聴覚文化論・音楽社会史」をうたっているものの脱線気味。主著『サウンドとメディアの文化資源学—境界線上の音楽』(春秋社、2013)。2013年、紫綬褒章を受章。

MODERATOR

**長島 確** Kaku Nagashima  
[ドラマツルク / 翻訳家]



日本におけるドラマツルクの草分けとして、様々な演出家・振付家の作品に参加。近年は演劇の発想やノウハウを劇場外へ持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に関わる。「アトレウス家」シリーズ、「つくりかた研究所」、さいたまトリエンナーレ2016「←」などジャンルをまたぐ活動多数。

## 12.10

## 仕事を知る 7

AM

## 領域を横断するアートの仕事

GUEST

**古原彩乃** Ayano Furuahara  
[アートコーディネーター]



1987年東京生まれ。早稲田大学第一文学部日本文学専修卒業。NPO法人BEPPEU PROJECTでワークショップの企画、運営やパフォーミングアーツ制作を担当後、2014年よりフリーランス。学校、児童館、福祉施設など多様な場で芸術、学び、遊びをテーマにしたワークショップやイベントを企画、コーディネートする。

HOST

**家入健生** Kensei Ieiri  
[スクールマネージャー]

## 思考を深める / 想像を広げる 6

PM

越境の作法——  
セクシュアリティと表現

GUEST

**川口隆夫**  
Tatsuo Kawaguchi  
[ダンサー / パフォーマー]



1996年から2008年まで「ダムタイプ」に参加。2000年以降はソロを中心に、演劇・ダンス・映像・美術をまたぎ、舞台パフォーマンスの幅広い可能性を探求している。『a perfect life』で第5回恵比寿映像祭(東京都写真美術館、2013)に参加。『大野一雄について』(2013)、『TOUCH OF THE OTHER—他者の手』(L.A., 2015 / 東京、2016)など。

GUEST

**山田創平** Sohei Yamada  
[社会学者 / 京都精華大学  
人文学部総合人文学科長・准教授]



1974年群馬県生まれ。名古屋大学大学院修士。博士(文学)。厚生労働省所管の研究機関や民間のシンクタンクなどを経て現職。編著書に『たたかうLGBT&アート』(法律文化社、2016)、共著書に『ジェンダーと「自由」—理論、リベラリズム、クイア』(彩流社、2013)など。特定非営利活動法人アートNPOリンク理事。

MODERATOR

**大澤寅雄** Torao Ohsawa  
[ニッセイ基礎研究所芸術文化  
プロジェクト室 / 文化生態観察]



1970年生まれ。慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜、東京大学文化資源学公開講座運営委員を経て現職。

## 2017.1.14

## グループワーク 4

AM

30年後の東京を見据えて、  
3年間のプロジェクトを考える  
(課題発表)

## 修了課題の発表

COMMENTATOR

**森司** Tsukasa Mori  
[スクールマネージャー]

COMMENTATOR

**坂田太郎** Taro Sakata  
[スクールマネージャー]

COMMENTATOR

**坂本有理** Yuri Sakamoto  
[スクールマネージャー]

COMMENTATOR

**橋本誠** Makoto Hashimoto  
[スクールマネージャー]

COMMENTATOR

**嘉原妙** Tae Yoshihara  
[スクールマネージャー]

## 基礎 1 担当スクールマネージャー

**阿比留ひろみ** Hiromi Abiru  
[一般社団法人ノマドプロダクション]

大学卒業後、広告代理店勤務を経て静岡県袋井市月見の里学遊館企画スタッフを務め、ワークショップや講座などを担当。その後、大学勤務の傍らNPOにて子供向けワークショップ等を企画制作する。

**佐藤李青** Risei Sato  
[アーツカウンシル東京  
プログラムオフィサー]

国際基督教大学卒業。東京大学大学院人文社会系研究科(文化資源学)博士課程満期退学。小金井アートフル・アクション! 実行委員会事務局局長を経て、2011年より現職。東京アートポイント計画、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業、Tokyo Art Research Labでは「思考と技術と対話の学校」と研究開発プログラムを担当。

**家入健生** Kensei Ieiri  
[アーツ前橋学芸員]

1987年熊本県生まれ。2011年立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部卒業。在学中よりNPO法人BEPPEU PROJECTの運営などに携わる。2013年よりアーツ前橋にて地域アートプロジェクトや滞在制作などを担当するほか、アーティストとともにアトリエ・展示のためのスペースMaebashi Worksの運営や、前橋中央通り商店街理事なども担当。

## 修了式



## 通年課題〈思考編〉

毎回の授業とレポートに追われながらも、「アートプロジェクトとは何か?」を自分なりに考えてきた受講生たち。

通年で、グループワークからアートプロジェクトを構想する課題に取り組んできました。

最終日には、校長とスクールマネージャーたちを前に企画を発表し、1年を締め括りました。

# Q.

### 通年課題

#### 「30年後の東京を見据えて、3年間のプロジェクトを考える」

企画書提出先 | プレゼン先: アーツカウンシル東京

予算規模 | 下限・上限なし(人件費・事務所の固定費等は計上せず、事業費のみ)

立ち位置 | 各グループの設定に準ず(今回の設定では特に申請団体の制約をつけない。  
各グループが自由に設定すること)

ex) NPO、一般社団、株式、任意団体、実行委員会、財団等…

🔗 課題 | 1 以下の内容を含めた企画書をグループごとに作成する。

- 事業概要(実施期間/実施場所/活動対象者/目的・背景)
- 事業概要(400字以内)
- 実施により期待される成果・効果(200字以内)
- 2年目の展開(300字以内)
- 3年目の展開(300字以内)
- 事業終了後の具体的な展開(300字以内)
- 30年後の東京への今回の問題提起(300字以内)
- 企画内容
- 実施スケジュール
- 実施体制
- 予算書(収入/支出)

🔗 課題 | 2 事業計画書の内容についてプレゼンテーションをする。  
(各グループ持ち時間10分程度+質疑応答)



リサーチ/フィールドワーク



グループディスカッション



プレゼンテーションと講評

# A.

### Group 01

#### 東京サコククリエイティブ 中学生と大人で 30年後の東京を考える

多様化する社会での「関係性の断絶」への危機感と、東京と地方、人と人の関係を考えることから「鎖国」をキーワードに30年後を想像。対話の重要性を再考し、30年後に大人になる中学生と現在の社会をつくる大人がアートを介し、未来をともに考えるプロジェクトを立案。

1年目はアーティストが大人と中学生とワークショップを行い、2年目に中学生が作品として表現、大人はそれをサポートする。3年目に展覧会とアーカイブ制作に取り組み、30年後に大人となった中学生にアーカイブを届け、想像した未来と現在を比較するきっかけをつくる。



議論のイメージを可視化した図

### Group 03

#### アートコンビニプロジェクト 多様な人々が集まる 東京ならではのART MASH UP

30年後の東京に住む人々の「言語」「経済」「生活スタイル」の多様化から生まれるであろうコミュニティ間の分断や格差に対して、それらを越えて交流・活動(文化・芸術・アート)ができる「アートコンビニ」をつくる。コンビニのように東京全域にネットワークを張り巡らせ、多様な人々が混ざり合うことで生まれる新たな東京の文化を創造。実験店舗の設立や既存施設の間借りなどを通して、1年目に「創立・安定」、2年目に「教育・拡大」、3年目に「拡大・自走」を目標とし、3年間で300件設立を目指す。



「アートコンビニ」イメージ

### エントリーした企画一覧

### Group 02

#### めくるプロジェクト 人々の「幸せな瞬間」を 可視化させる

二子玉川を舞台に都市の画一的な「幸せ」を見つめ直す機会をつくるプロジェクト。課題に留まらず「実現したい」という想いから、グループメンバーが深く関わる地域を選択し、フィールドワークや地域イベントへの参加することから発想する。

1年目に「幸せ」の物語を収集し、「辞書」としてアーカイブ化。2年目に「辞書」を使った疑似体験(演劇公演やワークショップ)の仕掛けづくり。3年目にプロジェクトの参加者が「幸せ」を他者と共有し、社会に循環させるための「ポスト」を展開する。



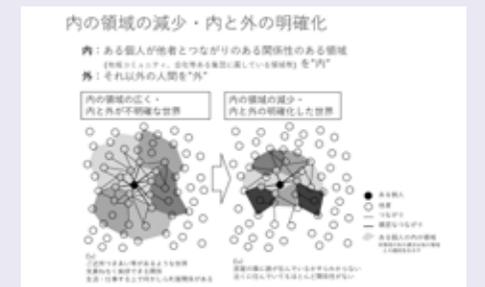
プロジェクト用に制作した動画の一場面

### Group 04

#### おとな・じどう館 地域の誰もが自由に立ち寄れる 作業所づくり

未来のテクノロジーの進化と自動化・機械化の進行によってコミュニケーションの機会が減少していくことを想定し、誰もが自由に立ち寄り、居場所とし、共同作業ができる「おとな・じどう館」をつくる。

行政と連携し、都内の空き家を活用し、「カフェ・居場所」と「ワークスペース」の機能を持たせる。アーティストのワークショップや発表会を行うが、アーティスト主導から徐々に住民主体の活動へと移行し、コミュニティ同士、コミュニティと行政の連携・協働できる関係づくりを目指す。



プレゼンテーションで使用した問題意識の概念図

## 2

## 技術編

現場の仕事を実際の企画・運営プロセスにそって具体的に学び、自分で問いを立てる力を養います。多様なバックグラウンドを持つ仲間とグループワークを行うことで、役割分担や調整など自分とは異なる他者と協働しながら、アートプロジェクトをかたちにする力を身につけます。

## 知る

- 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価など)
- 現場の実務(書類の読み方、事業計画書[企画書・予算書・体制表・スケジュール]のつくり方、共通言語の獲得の仕方、リサーチ手法、会議の仕方、調整の仕方、協働作業の進め方、プレゼンテーションのやり方など)

## 考える

- 私は、チームでどのような役割を担うのか？
- 私たちは、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか？
- 私たちは、誰とどのようにアートプロジェクトを行うのか？

## かたちにする

- 運営体制(組織の位置づけ確認、役割分担、進行管理、調整、交渉など)
- 企画(事業計画書作成)

学びのサイクル〈技術編〉

## アクションのすべてが演習

アートプロジェクトをかたちにするには技術が必要です。はじめからおわりまでのワークフローをたどりながら、そのときどきに求められる技術とは何かを考えます。グループワークでは、事業計画書(企画書・体制表・スケジュール・予算書)の作成に取り組みます。チームワークをとりながら、企画を具体的な計画に落とし込む作業を通して、アートプロジェクトをはじめるために必要なプロセスを経験します。

## 1 | 講義

- 講師の話聞く
- [テーマ]
- 技術編の準備運動
- アートプロジェクトを「立ち上げる」ための準備運動
- アートプロジェクトを「動かす」ために必要なことを知る
- アートプロジェクトの「伝え方・残し方」について考える
- アートプロジェクトの「続け方・終わり方」について考える



- その日のテーマに沿ったワーク(演習)に取り組む

## 2 | グループワーク

- 企画のためのブレインストーミング、リサーチを行う
- 取り組みたいテーマや対象を言語化し、コンセプトをまとめる
- 役割分担をし「企画書」「体制表」「スケジュール」「予算書」を作成する



## 3 | 放課後

- 授業のふりかえり、気づきをレポートにまとめる
- 次回の授業のための予習をする
- 事業計画書のためのリサーチ、書類の更新作業



- 上記を繰り返し、最終回へ

## 4 | 最終発表

- 事業計画書のプレゼンテーション(20分)+講評
- グループワークのふりかえり

授業毎 | 授業時の気づきをレポートにまとめる(400字以内)/課題図書を読む/リサーチをする  
グループワーク課題 | 事業計画書の作成&プレゼンテーション

# 2016.6.18 7.9

## ガイダンス

AM

## 合同プログラム

基礎プログラムについて

## GUEST

### Nadegata Instant Party (NIP)

[中崎透+山城大智+野田智子]  
Toru Nakazaki+Daisuke Yamashiro+  
Tomoko Noda

アートプロジェクトを  
科学する

## GUEST

### 椿昇 Noboru Tsubaki

[コンテンツボラリー・アーティスト]

## HOST

### 森司 Tsukasa Mori

[Tokyo Art Research Lab ディレクター/  
「思考と技術と対話の学校」校長/  
東京アートポイント計画ディレクター]

※プロフィール及び詳細はP10参照

## 技術編の準備運動

AM

情報収集について/  
私の考える  
アートプロジェクト

## LECTURER

### スクールマネージャー一同

All School Managers

## 演習

自分の興味・関心を掘り下げる

## 技術編の準備運動

PM

私の興味を掘り下げる

## LECTURER

### スクールマネージャー一同

All School Managers

## 演習

チームの共有知をつくる

## 技術編の課題について

授業内で展開した演習のほかに、ふりかえりや予習として、毎回授業前後に様々な課題に取り組みました。その内容の一部をご紹介します。

### 〈予習例〉

- 課題図書を読んで気づきを書き出す
- アートプロジェクトを実施する際の資金獲得方法についてリサーチする
- 自分が心惹かれた「伝えることば」を持ってくる

### 〈復習例〉

- 授業で聞いたゲストの話について自分なりの気づきをまとめる
- ドキュメントブックをつくる：プロジェクトを本としてまとめる構想を練る
- 「アートプロジェクトとは何か」について、自分の答えを出す(400字以内)

### 〈課題図書例〉

- 『かかわり方のまなび方 ワークショップとファシリテーションの現場から』西村佳哲著、ちくま文庫(単行本は筑摩書房)/2014年
- 『アトレウス家の建て方』長島確著、東京文化発信プロジェクト室/2013年
- 『思考と技術と対話の学校 基礎プログラムI [思考編]「思考を深める/想像を広げる6」講義録 2014』アーツカウンシル東京、一般社団法人ノマドプロダクション制作/2016年
- 『小豆島にみる日本の未来のつくり方:瀬戸内国際芸術祭2013 小豆島 醬の郷+坂手港プロジェクト「観光から関係へ」ドキュメント』椿昇、多田智美、原田祐馬著、誠文堂新光社/2014年
- 『クリスト&ジャンヌ=クロード クリストのヴァレー=カーテン』TCエンタテインメント/2006年 [DVD]
- 『ぐるぐるヤマトプロジェクト 2010-2013』東京文化発信プロジェクト室/2014年
- 『伝わる・揺さぶる! 文章を書く』山田ズーニー著、PHP研究所/2001年

### 〈その他課題例〉

- 話題になっているアートプロジェクト/展覧会に足を運び、そこで考えたことをグループでシェアする

# 7.10

## アートプロジェクトを 立ち上げるための準備運動

AM

アイデアは  
どこからやってくる?

## GUEST

### 長島確

Kaku Nagashima  
[ドラマツルク/翻訳家]  
※プロフィールはP14参照

## HOST

### 及位友美 Yumi Nozoki

[スクールマネージャー]



## 演習

自由な発想で  
アイデアの種をかたちにする

## HOST

### スクールマネージャー一同

All School Managers

現場に出会うフィールド  
ワーク:谷中のおかって  
と「まちを歩く」

## GUEST

### 谷中のおかって

Yanaka no okatte

[渡邊梨恵子、  
大西健太郎]

Rieko Watanabe+  
Kentaro Onishi



東京都台東区谷中地域を拠点に、アートイベントの企画・運営・サポートを行う一般社団法人。文化企画を通じて、世代を超えた人々や異なる習慣や価値観を持つ人々など、様々な人々と文化を共創する場づくりを目指している。「妄想」と「ミックス」をキーワードに、精神的な開放感を味わえる時間・空間を提供している。

## HOST

### 坂田太郎

Taro Sakata

[スクールマネージャー]



## 演習

現場を体感することから  
場づくり/関係性づくりを学ぶ

# 7.30

## アートプロジェクトを 立ち上げるための準備運動

AM

アートプロジェクトへの  
問いを深める/  
自分の役割を考える

## LECTURER

### スクールマネージャー一同

All School Managers

## 演習

アートプロジェクトとは?  
を言語化する

## アートプロジェクトを 立ち上げるための準備運動

PM

コンセプトメモを書く/  
企画の  
ブレインストーミング

## LECTURER

### スクールマネージャー一同

All School Managers

## 事業計画作成ワーク

5年後の東京を見据えた上で、  
いま取り組むべき  
プロジェクトを考える

長島確さんのブレインストーミングの手法をヒントに、アイデアの種を育てるようにコンセプトメモを書くワークを行った。個人の切実な想いから出発し、チームでのブレインストーミングを通してアイデアを発展させていった。

# 8.20

## アートプロジェクトを 立ち上げるための準備運動

AM

文化支援の  
考え方を学ぶ/  
資金獲得の実際を知る

## GUEST

### 若林朋子

Tomoko Wakabayashi

[プロジェクト  
コーディネーター/  
プランナー]



英国で文化政策とアートマネジメントを学んだのち、1999～2013年公益社団法人企業メセナ協議会に勤務。2013年よりフリーランスとなり、各種事業のコーディネーター、企画立案、編集、執筆、調査研究、事業評価等に取り組む。NPO法人理事(芸術家と子どもたち、JCDN、アートプラットフォーム、芸術公社)、監事(ON-PAM、音まち計画、アーツエンブレイス、TPAM)。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授。

## HOST

### 及位友美 Yumi Nozoki

[スクールマネージャー]

## 演習

芸術・文化をめぐる  
お金のあり方考える

## アートプロジェクトを 立ち上げるための準備運動

PM

受信力、きく力の  
解像度を上げる

## GUEST

### 西村佳哲

Yoshiaki Nishimura

[リビングワールド代表]



「つくる」「書く」「教える」3種類の仕事に携わる。デザイン・プロジェクトの企画立案とチームづくり、ディレクションおよびファシリテーター役を担うことが多く、各地の地域プロジェクトに関わるほか、「インタビューの教室」などのワークショップを主催。著書に『自分の仕事をつくる』(晶文社/ちくま文庫)、『ひとの居場所をつくる』(筑摩書房)等。

## HOST

### 坂本有理 Yuri Sakamoto

[スクールマネージャー]



## 演習

5通りの設定を通して  
きくことは大事、ということを知る

# 8.21

## アートプロジェクトを 動かすために必要なことを知る

AM

所属することについて  
考える

## GUEST

### 菊池宏子

Hiroko Kikuchi

[アーティスト/  
コミュニティデザイナー]



ボストン大学芸術学部彫刻科卒、米国タフツ大学大学院博士前期課程修了。美術館やまちづくりNPOなどを通じ、エデュケーション活動やコミュニティ・エンゲージメント戦略・開発などに多数携わる。米国在住20年を経て、2011年に帰国。武蔵野美術大学、立教大学兼任講師。米国・日本クリエイティブ・エコロジー代表、NPO法人インビジブル、クリエイティブ・ディレクターとして活動中。

## HOST

### 坂田太郎 Taro Sakata

[スクールマネージャー]

## 演習

ディベートの実践を通して  
自分の立ち位置の  
文脈化を試みる

## 事業計画作成ワーク

PM

チームビルディング、  
“わたしの企画”を深める

各自、課題として深めてきたコンセプトノート=企画のアイデアを持ち寄り、その5W1Hを言語化してチームで共有した。「橋を架ける」というキーワードが立ち上がった。

9.10

アートプロジェクトを動かすために必要なことを知る

AM

場の文化、ルールの育て方について考える

GUEST

松尾真由子

Mayuko Matsuo  
[Breaker Project  
事務局長]



2008年文化芸術活動のつなぎ手になりたいという思いから、参加者やサポートスタッフとして関わっていたBreaker Projectに事務局として勤務。水都大阪2009にて藤浩志「かえるシステム」サブディレクター兼任。2011年より事務局長を務める。地域の課題に向き合いながらもアートを課題解決の手段としないプロジェクトの運営を行っている。

HOST

坂本有理 Yuri Sakamoto

[スクールマネージャー]

演習

場づくりに必要な視点、プロジェクトを動かす際のスキルについてディスカッションする

事業計画作成ワーク

PM

チームで目的を共有する

キーワード「橋を架ける」をヒントに、企画のコンセプトと枠組み、内容となる5W1Hについて議論した。「5年後の“東京”を見据えたプロジェクト」というお題への応答を意識してワークに取り組んだ。

9.11

アートプロジェクトの伝え方・残し方について考える

AM

日々の活動の記録について考える

GUEST

石幡愛

Ai Ishihata  
[としまアートステーション構想事務局長]  
※ プロフィールはP12参照

HOST

坂本有理 Yuri Sakamoto

[スクールマネージャー]

演習

カードゲームを通してプロジェクトの記録について考える

アートプロジェクトの伝え方・残し方について考える

PM

アーカイブの残し方と活動の伝え方

GUEST

四元朝子

Tomoko Yotsumoto

[かごしま情報文化センター]



上智大学フランス文学科卒業。株式会社ワコールアートセンター/スパイラル広報を経てアヴィニヨン大学アーツマネジメント学科へ編入。帰国後、フランスダンス03広報、山口情報芸術センター (YCAM) シアター部門企画制作、スパイラル広報を経て、2012年、故郷鹿児島に戻る。2013年～2017年春までかごしま文化情報センター (KCIC) の企画制作/広報チーフ。

HOST

及位友美 Yumi Nozoki

[スクールマネージャー]

演習

実施予定プログラムの広報計画を考える

事業計画作成ワーク

テーマを深める

プロジェクトの内容を深めるために、「橋を架ける」というテーマを掘り下げるディスカッションを行った。グループワークとしてどのようなプログラムに取り組みたいか、5W1HのWhyを言語化する作業に取り組んだ。

10.15

事業計画作成ワーク

AM

リサーチの共有

事業計画書の軸となる企画を「渋谷の暗渠<sup>あんきょ</sup>」をテーマとした内容に決定したうえで、アート班と歴史班に分かれてグループでリサーチを行う課題に取り組んだ。その内容を全体で共有し、プロジェクトの構想を練った。

事業計画作成ワーク

PM

チームならではの企画を立ち上げる

川沿いに展開されたプロジェクトやアーティストの実践をリサーチしたアート班、渋谷の都市計画や、暗渠発生の経緯を調べた歴史班が見聞をもちより、5W1Hを詰めた。メンバーの適正ややる気に応じて、役割分担を行った。

11.26

アートプロジェクトの伝え方・残し方について考える

AM

インハウス広報の視点から考えるアートプロジェクトの伝え方

GUEST

中田一会

Kazue Nakata  
[アーツカウンシル東京  
プログラムオフィサー/  
コミュニケーション・  
デザイン担当]



武蔵野美術大学卒業後、IT関連出版社に就職。IR (投資家向け広報)と電子書籍の企画編集を担当。2010～2015年春まで、株式会社ロフトワークのPR兼コミュニケーションディレクターとして勤務。2015年4月より現職。

HOST

坂本有理 Yuri Sakamoto

[スクールマネージャー]

演習

校正・広報計画の策定を通して言葉を磨く

アートプロジェクトの伝え方・残し方について考える

PM

出来事の創出からアーカイブまで——プロジェクトを編集する

GUEST

多田智美

Tomomi Tada  
[編集者/MUESUM]



1980年生まれ。編集者、株式会社MUESUM代表。「出来事が生まれるところからアーカイブまで」をテーマに、アートやデザイン、福祉、地域にまつわるプロジェクトに携わり、書籍やタブロイド、WEB、イベントなどの企画・編集を手がける。DESIGNEASTディレクター。京都造形芸術大学非常勤講師。

HOST

及位友美 Yumi Nozoki

[スクールマネージャー]

演習

プロジェクトを簡潔な言葉で表現する

事業計画作成ワーク

他者に伝えることばを練り上げる

11.27

アートプロジェクトの伝え方・残し方について考える

AM

アートプロジェクトの検証とドキュメントにおける映像の可能性

GUEST

吉澤弥生

Yayoi Yoshizawa  
[共立女子大学文芸学部  
准教授/社会学者]



大阪大学大学院修士、博士(人間科学)。芸術社会学を専門として、労働、政策、運動、地域の視座から現代美術を研究。大阪市の現代芸術事業やTokyo Art Research Lab事業などを通して芸術文化事業の記録・調査・検証に取り組む。NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]理事。NPO法人アートNPOリンク理事。

山城大督

Daisuke Yamashiro

[美術家/映像ディレクター/  
ドキュメント  
コーディネーター/  
山城美術代表]



映像メディアを用い、その場でしか体験できない「時間」を作品として展開する。2006年よりアートコレクティブ Nadeyata Instant Partyを結成。また、山口情報芸術センター[YCAM]にてエデュケーターとして、ワークショップの開発・実施や、教育普及プログラムのプロデュースを担当(2006～2009年)。あいちトリエンナーレ2016広報映像ディレクターを務めるなど、芸術文化分野における映像記録のコーディネートを多く手がける。

HOST

坂田太郎 Taro Sakata

[スクールマネージャー]

事業計画作成ワーク

PM

プレゼンテーションを準備する

GUEST

山城大督 Daisuke Yamashiro

[美術家/映像ディレクター/ドキュメント  
コーディネーター/山城美術代表]

12.17

事業計画作成ワーク

AM

「事業計画」発表/修了式

COMMENTATOR

森司 Tsukasa Mori

[Tokyo Art Research Lab ディレクター/  
「思考と技術と対話の学校」校長/  
東京アートポイント計画ディレクター]

佐藤李青 Risei Sato

[スクールマネージャー]

橋本誠 Makoto Hashimoto

[スクールマネージャー]

アートプロジェクトの続け方・終わり方について考える

PM

アートプロジェクトを続けること、終わること

GUEST

芹沢高志 Takashi Serizawa

[P3 art and environment 統括ディレクター]  
※ プロフィールはP11参照

HOST

坂田太郎 Taro Sakata

[スクールマネージャー]

基礎2担当スクールマネージャー

坂本有理 Yuri Sakamoto

[アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー]

Asian Contemporary Art Week事務局勤務を経て、2010年より現職。東京アートポイント計画の都内アートプログラムに加え、Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」を担当。

坂田太郎 Taro Sakata

[P3 art and environment  
リサーチャー/サイト・イン・レジデンス]

これまでP3 art and environment、アサヒ・アートスクエア(NPO法人アートNPOリンク)等に勤務。現在はP3でリサーチャーをしながら、自宅のある横浜でサイト・イン・レジデンスを継続。

及位友美 Yumi Nozoki

[voids / コーディネーター]

慶應義塾大学美学美術史学専攻卒業。取手アートプロジェクト、NPO法人アートネットワーク・ジャパンなどを経て、2014年より一般社団法人ノマドプロジェクト理事。2015年より株式会社ボイズを立ち上げコーディネート、編集・執筆に携わる。

## 通年課題〈技術編〉

アートプロジェクト運営のはじまりからおわりまでのフローに沿って、現場の様々なシチュエーションで求められる技術と向き合う「技術編」。

年間を通してゲスト講師による演習を中心とした授業に加え、11名の受講生でひとつの事業計画書を作成するグループワーク課題に取り組みました。

# Q.

### 通年課題

「5年後の東京を見据えて、いま取り組むべきプロジェクトを考える」

# A.

### 事業計画概要

2020年の東京オリンピックを控え、加速度的な変化を見せる東京の街。東京オリンピックが過ぎたあと、自分たちが暮らす“東京”の未来に必要なことは何か。足元から思考し、いま取り組むべきプロジェクトを立案する。

渋谷暗渠“Here”～「暗渠」から今ココと過去・未来を体感する～

実施期間 | 2017年4月～2018年3月、イベントは2018年1月実施予定

実施場所 | 渋谷区・キャットストリート(旧渋谷川)、現在の渋谷川／古川沿い、またその周辺地域

事業背景・目的 | 渋谷の街は2020年東京オリンピックに向けた再開発が進んでいるが、その下には暗渠になった渋谷川が流れている。渋谷川は戦後の都市開発のなかで生活排水が流れる小川になり、1964年の東京オリンピック開催時には公衆衛生上の問題で蓋がされた。こうした渋谷の暗渠の過去・現在・未来に注目し、アーティストのまなざしを借りて、見えていなかった風景を再発見することを目指す。2020年以後も東京に住み続けるために、都市開発により変化の途上にある東京で、身体感覚を取り戻すプロジェクトを立ち上げる。

事業内容 | 1 青い山に登る、渋谷川を下る、たどる、めくる(リサーチ／研究会／ドキュメント制作プロジェクト)  
渋谷・青山エリアの豊かな地形や暗渠を自然の風景に見立て、可視化されていなかった風景を発見するプロジェクト。アーティストによるリサーチ(非公開)／スタディ(公開勉強会)を通して実際に歩きたくなる渋谷・青山エリアマップ、ツアールートを開発し、アナログメディアである本を制作する。

事業内容 | 2 暗渠ブックセンター(動く拠点／リヤカープロジェクト)  
渋谷川キャットストリートにて、リヤカーによる「暗渠ブックセンター」を展開し、荷台の上に暗渠情報の地図や、書籍、資料、リサーチの道具などを展示する情報発信拠点とする。リサーチに際しては長期的なフィールドワークを行う(時代の変遷、機能など)。観客とスタッフの交流スペースとしてセンターが機能することを目指す。

予算 | 364万円

主催 | 渋谷暗渠“Here”実行委員会

## レポート | 事業計画作成ワーク

グループワークでは、アイデアを膨らませるブレインストーミングからチームビルディング、会議の実施やプレゼンテーションへ向けた準備など、段階に応じたプロセスに取り組みました。最初のステップとしては、11名それぞれの興味関心や取り組みたいテーマを議論のテーブルにのせ、ブレインストーミングを実施。文化の境界、過去現在未来といった時間軸、都市の多様性、消費社会についてなど、気になるキーワードを挙げながら話し合いを重ね、複数のコミュニティや地域、未来と過去といった異なるもの間に「橋を架ける」という切り口のテーマに着地しました。

さらにコンセプトやプログラム内容のイメージをすり合わせるため、個人の考えを伝え合い、プロジェクトが目指すべきものを共有していきました。その後、都市における「身体感覚の不在」

というキーワードが新たに提起されます。身体や五感を使いながら都市を捉え、新たな東京の風景を再発見することや、東京の可能性のあり方を議論しました。

「身体感覚の不在」というテーマに向き合うモチーフとして着目したのが「暗渠」です。必要なリサーチを進めるとともに、チーム内の役割を分担しながら、事業計画書をまとめました。最終日のプレゼンテーションで、その成果を発表。発表を通して、暗渠プロジェクトを軸にアイデアを膨らませることはできたものの、期間・予算などプロジェクトの全体を通した構造の詰めが甘かったことに気づきました。

さらに、企画の「核」を改めて確認し、実現性の高いプロジェクトにするためには何が必要か、ディスカッションを重ねました。

## 受講生の声

地方自治体職員、起業家、技術者、サラリーマン、広告代理店勤務、アートNPO出身者、学生など、所属の多様なメンバーが集まった受講生たち。生活スタイルや、前提となる考え方や知識、意見の相違など、ひとつのグループワークに取り組むことには様々な困難がありました。関わる人が多様であることの難しさややりがい、アートプロジェクトの現場にもつながる状況かもしれません。

01 アートプロジェクトでは多様な関係者や、場との関係を考えなければいけないということ、グループワークを通じて体感しました。11人で取り組んだグループワークは、人数が多いのではないかと気になりましたが、実際の現場ではもっと多い場合もあることを考えると、今回の経験は参考になりそうです。

02 プロジェクトを立ち上げることとプログラムをつくることの間には、違いがあります。チーム内でその意識の差を埋めることが難しかったです。集大成として何か一つの現場を実施するのではなく、トライ＆エラーの場としてグループワークに取り組める環境があると良いなと思いました。

03 「学校」という枠組みのなかで受講生が担う役割、連携のあり方、ビジョン、プロジェクトの規模感などの共有が難しく、今後の課題ではないかと思えます。学校での活動を通して、社会にそれぞれが向き合うのと同じように、アートにそれぞれがどう向き合うか、自分なりの向き合い方を考えることが大切だと感じました。



## 3

## 対話編

企画立案から実施、評価と検証までの一連のプロセスを実際に経験することで、アートプロジェクトの全体像や流れを掴みます。アーティストや外部の人、プロジェクトを動かすチームの仲間など、自分とは異なる他者の視点や意見を対話を通して共有し、チームでアートプロジェクトを動かす力を身につけます。

知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アートを捉える視点(美術史、哲学、社会学、科学など)</li> <li>● アーティスト(思考、作品)</li> <li>● アートプロジェクトを取り巻く環境</li> <li>● アートプロジェクトが直面する課題</li> <li>● 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価、リスクアセスメント、危機管理、雇用問題、法律、インターン・ボランティアマネジメントなど)</li> </ul>
----	---

考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 私は、いまどのようなアートプロジェクトをかたちにしたいのか？</li> <li>● 私は、どのような技術を強みにアートプロジェクトと関わるのか？</li> <li>● 私たちは、どのような場でアートプロジェクトを行うのか？</li> <li>● 私たちは、誰とともに、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか？</li> <li>● 私たちは、アートプロジェクトにおいて何に挑戦するのか？</li> </ul>
-----	---

かたちにする	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運営体制(プロジェクトの設定・位置づけ確認、情報共有の徹底、共通言語の獲得、座組み設計、ネットワークなど)</li> <li>● 企画(事業実施計画書作成)</li> </ul>
--------	--

動かす	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 準備(ブレインストーミング、情報収集・リサーチ)</li> <li>● 運営(事務局、進行管理、資金調達、会場手配、人材手配、許認可申請、リスクマネジメントなど)</li> <li>● 広報・PR、プレゼンテーション</li> <li>● 記録・アーカイブ、ふりかえり、報告・検証・評価</li> </ul>
-----	---

学びのサイクル〈対話編〉

## 一連のプロセスを実践を交えて経験

アートプロジェクトは、ともにプロジェクトを動かすチームや仕事を依頼するアーティストなど外部の人とコミュニケーションをとりながら進めていくことが必須です。対話編では、1年を通してアーティストとスクールマネージャーが伴走し、企画立案から実施、ふりかえりまでのアートプロジェクトの一連のプロセスを経験するなかで、チームでプロジェクト実施するための対話力を養います。

1 | 企画を考える  
(構想段階)

講義 | アーティストやゲストの話聞きケーススタディを学ぶ  
ブレインストーミング | 企画のアイデアを考える、議論する  
進捗報告 | 次回授業までに、何をどうやるか共有する



- 受講生MTG (授業外での活動)
- 企画アイデアについてブレインストーミング
- リサーチ(インターネットや書物を通した調査)

2 | 企画を動かす  
(準備段階・実務的な動き)

グループワーク | 体制表を作成する、スケジュールを決める  
ディスカッション | リサーチやフィールドワークを踏まえて、企画の骨子を決める  
依頼・交渉 | アーティスト、デザイナーへ依頼  
許認可 | 会場使用、消防、警察などの許認可を取る



- 受講生ミーティング
- 進捗確認・作業

3 | 実践  
(プロジェクトの運営)

準備 | 当日の進行表、アンケートを作成する  
搬入・搬出 | 参加者やスタッフの導線を意識した会場設営を行う  
当日運営 | 参加者やスタッフの安心・安全を第一に運営する



- 受講生MTG (授業外での活動)
- 実施後のふりかえり、アンケート集
- アンケート集計・検証、記録物作成
- 実施報告発表までに、何をどうやるか共有する

4 | 評価と検証  
(実施後のふりかえり)

実施報告発表 | プレゼンテーション+講評  
クラス全体からフィードバックをもらう  
ふりかえり | アーティスト、スクールマネージャーから細かくフィードバックをもらい反省会を行う

授業毎 | 授業時の気づきをレポートにまとめる(400字以内)/企画進行のための準備・作業

個人課題 | アーティストが過去に手がけた、または現在進めているプロジェクトの調査(取材)レポート(5,000字程度)、実践プログラムのなかで担当した役割を通して考えた気づきのレポート&実施報告プレゼンテーション

グループワーク課題 | 実践プログラムの企画立案・運営・ふりかえり

# 2016.6.18 6.25

## 合同プログラム

### 基礎プログラムについて

#### GUEST

### Nadegata Instant Party (NIP)

[中崎透+山城大督+野田智子]  
Toru Nakazaki+Daisuke Yamashiro+  
Tomoko Noda

### アートプロジェクトを科学する

#### HOST

### 椿昇 Noboru Tsubaki

[コンテンツボラリー・アーティスト]

#### HOST

### 森司 Tsukasa Mori

[Tokyo Art Research Lab ディレクター/  
「思考と技術と対話の学校」校長/  
東京アートポイント計画ディレクター]

※プロフィール及び詳細はP10参照

## オリエンテーション

### レクチャーシリーズI

アートプロジェクトに取り組む前に。～NIPの各活動をケーススタディとして心得と技術を学ぶ～

- アイデアの種の見つけ方
- アートにおける「記録」
- アートマネージャーの仕事について

## オリエンテーション

### ブレインストーミング

- 自己紹介
- 企画のアイデア出し
- アーティストと対峙するときの心構えについて

## 対話編のメンバーについて

対話編では、アーティストとスクールマネージャー、そして受講生の三者が協同しながら、1年間対話を重ねていきます。立場の異なる固定されたメンバーでの対話が、より深い思考を促します。

### Nadegata Instant Party (NIP)

[中崎透+山城大督+野田智子]



※プロフィールはP10参照

### 滝沢達史

Takizawa Tatsushi  
[美術家]

多摩美術大学油画専攻卒業。東京都知的障害養護学校にて美術教育に従事したのち退職。2009年、幼少期を過ごした津南町にて越後妻有トリエンナーレに参加。以後国内のアートプロジェクトにて多数作品を発表。場の背景を主題とし、様々な表現手法で作品を展開している。直近の活動として、若者たちとの協働による作品展示(表現の森/アーツ前橋)や、椅子を背負って霊山に登り土間に埋める行為(福島県喜多方市)、島の遺物を収め続ける博物館「粟島研究所」(瀬戸内国際芸術祭)など、多岐にわたる表現活動を行っている。

### 嘉原妙

Tae Yoshihara  
[スクールマネージャー]



京都造形芸術大学卒業、大阪市立大学大学院創造都市研究科(都市政策学)修士課程修了。2010年秋よりNPO法人BEPPEU PROJECTにて、国東半島アートプロジェクト(2012、2013)、国東半島芸術祭(2014)など地域をフィールドに様々なアートプロジェクトの運営を経験。2015年4月より現職。

### 橋本誠

Makoto Hashimoto  
[スクールマネージャー]



横浜国立大学卒業後、フリーランスのアートプロデューサー(2005～)、東京文化発信プロジェクト室(2009～2012)を経て、一般社団法人ノマドプロダクションを設立(2014)。芸術祭・アートプロジェクト等の企画制作、調査、各種ツール制作、ドキュメントコーディネーターなどを手がけている。TARL(Tokyo Art Research Lab)事務局長。

### 野崎美樹

Miki Nozaki  
[スクールマネージャー]



University of LeicesterにてMA(Art Museum and Gallery studies)修了。2011年よりアーツ前橋(当時、前橋市美術館開設準備室)に学芸員として勤務。教育普及、ボランティア育成、コミッションワーク制作を担当しながら、地域と密接なつながりを持つ美術館の設立に携わる。川崎市岡本太郎美術館の教育普及担当学芸員を経て、2015年8月より現職。

# 7.23

## 集中講座

### レクチャーシリーズII

アートプロジェクトの現場で何が起きているのか～NIPの作品制作に携わったゲストの視点から、アートプロジェクトの課題や可能性について意識を高める～

- アートプロジェクトにおける「記録映像」について
- アートプロジェクトの「公共性」について考える
- NIPの制作過程とその伝え方・残し方

#### GUEST

### 藤井光 Hikaru Fujii

[アーティスト]



芸術は社会と歴史と密接に関わりを持って生成されていることに基づき、既存の制度や枠組みに対する問いを実証的に検証する作品を制作している。パリ第8大学美学・芸術第三期博士課程DEA卒業。近年では、「爆撃の記録」(東京都現代美術館「MOTアニュアル2016 キセイノセイキ」展)、「帝国の教育制度」(森美術館「六本木クロッシング2016」展)を発表。映画監督として『ASAHIZA人間は、どこへ行く』(ASAHIZA製作委員会、2013)、『プロジェクトFUKUSHIMA!』(PROJECTFUKUSHIMA製作委員会、2012)がある。

### 戸館正史

Masafumi Todate  
[文化政策/  
アートマネジメント]



(一財)地域創造・芸術環境部勤務。月見の里学遊館・企画スタッフアートマネージャー(2007～2012)、NPO法人アートフルアクション・プロジェクトディレクション、アーツカウンシル東京・調査員(2012～2014)、アーツ前橋・教育普及担当学芸員(2014～2015)を経て現職。日本文化政策学会、演劇人会議各会員。共著に『芸術と環境』(論創社、2012)がある。

### 西川美穂子

Mihoko Nishikawa  
[東京都現代美術館  
学芸員]



慶應義塾大学大学院美学美術史学科修了。2004年より現職。主な企画に「MOTアニュアル2008 解きほぐすとき」、「霞囀 ふたたび虹のかなたに」(2012)、「MOTアニュアル2012 Making Situations, Editing Landscapes 風が吹けば桶屋が儲かる」、「フルクサス・イン・ジャパン2014」などがある。

# 7.24

## 企画を動かす1

### プレゼンテーション &ブレインストーミング

- 企画アイデア発表

# 8.20

## 合宿

### フィールドワーク

- まちの遊休施設の活用事例を視察
- 空き家、廃校などの活用事例について協議

## 企画を考える(構想段階)

### アイデアの種を見つけ、企画の骨子を固める

対話編では受講生自身のなかにある関心や問題意識を認識し、企画の種となるアイデアを見つけることから始まった。「わたしはどんな問題意識を持っているのか」「なぜそれをアートプロジェクトで行うのか」「その企画を実現することで、どのような場を生み出したいのか」「誰とその企画をしたいのか」といった問いを自分自身に投げかけ考え言語化し、ときにはリサーチを行い、ほかの受講生やスクールマネージャー、NIPとの情報共有と議論を重ね企画の手がかりを探った。ゼロから企画を立ち上げることに慣れていない受講生は悪戦苦闘しながらも、企画のフレームを自らつくることで、当事者意識を持つ経験を積んだ。



8.21

## 合宿 | 企画を動かす2

プレゼンテーション  
&ブレインストーミング

- 企画発表

9.19

## 企画を動かす3

プロジェクト進捗共有  
&フィールドワーク

- ブラッシュアップした企画内容の共有
- 企画で取り上げた現場の視察

## 企画を動かす4

## プロジェクト定例会議

- 役割分担
- 企画、広報、進行管理のチーム毎のタスクの整理、連絡調整

11.13

## 企画を動かす5

## 企画会議

- 開催内容についての議論
- タスク確認と役割分担
- アーティストとの連絡調整

12.3

## 企画を動かす6

## 運営会議・準備

- 本番当日までにやるべきタスクの見直しと進捗確認、調整

12.23

## 実践

## 企画実践

- 本番直前リハーサル
- 機材チェック
- 開場前の展示風景の撮影
- 本番

1.28

## 評価と検証

## ふりかえり・修了式

- 当日のふりかえり(アンケート集計結果の共有、実施内容についての検証)
- ドキュメント制作について
- 1年間のふりかえり
- 今後の展開についてのプレゼンテーション
- 修了式

## COMMENTATOR

森司 Tsukasa Mori

[Tokyo Art Research Labディレクター/  
「思考と技術と対話の学校」校長/  
東京アートポイント計画ディレクター]

嘉原妙 Tae Yoshihara

[スクールマネージャー]

橋本誠 Makoto Hashimoto

[スクールマネージャー]

野崎美樹 Miki Nozaki

[スクールマネージャー]

## 企画を動かす(準備段階・実務的な動き)

一人ひとりがプロジェクトと  
チーム全体の動きを意識する

アートプロジェクトを計画する過程で、受講生は閉園が迫る「上野こども遊園地」と出会い、この遊園地を舞台とする架空のアートプロジェクトを想像し、そのアイデアを発表する1DAYのトークイベントを実施することを決定。「進行管理」「経理」「企画」「広報」の役割分担を行い「誰が、何を、いつまでにやるのか」の具体的なタスクの洗い出しを進めた。受講生は年齢も職業もライフスタイルもさまざまなため、授業以外にも定期的に会議を行い、ときにはSkypeやFacebookなどを活用して各自のタスクや全体の進捗状況を共有し、「作業が止まっているか。困っていることは何か」の「確認と相談」の対話を重ねながらプロジェクトの実現に向けて準備を進めた。



## 実践(プロジェクトの運営)

アーティスト、  
参加者の視点を意識し、  
リスク管理をする

「安心・安全第一」はプロジェクト実施において基本中の基本。本番当日の参加者の安全だけでなく、搬入搬出時にアーティストやスタッフが安全に作業できる環境を整えることも運営面において重要だ。「会場内の動線は確保できているか」「天吊りのものは耐荷重は十分か」「アーティストからの要望に対して準備は万全か」。起こりうる最低最悪の事態を想定し、かつ「こういう場をつくり上げたい」というプロジェクト達成の最高のイメージを思い描きながら、数歩先の手を読んで動くこと。もし何か失敗をしても決して自分だけで問題を抱えないこと。事実・状況を共有すること。それは、プロジェクトをより良くするために不可欠なことだが、頭だけで理解できることではない。受講生は今回、誰かと共にプロジェクトをつくり上げる経験を通して、そのことに気づき実感したようだった。

## 評価と検証(実施後のふりかえり)

## 実践したからこそその気づき

プロジェクトは実施して終わりではない。実施後にふりかえりを行い、「何ができて、できなかったのか」「良かったところはどこで、改善すべきところはどこか」「今回発見した課題に対して、どのような改善策が考えられるか」といった評価と検証をチーム全体と各自の担当の視点から行う必要がある。プロジェクトを実施すると「課題」が見つかる。今回もアーティストとのコミュニケーションやチーム間の意識の共有、直前準備の遅れなど様々な課題が見つかった。それらを整理し、できなかったことで終わらせず、「プロジェクトをより良くするためのヒント」をチームで話し合いながら見つける作業を通して、受講生は各自の「対話編」の1年間のふりかえりも行った。



## イベントレポート 〈対話編〉

受講生が東京における「時代の変化」や「場所と記憶」をテーマにアートプロジェクトを計画するなかで8月に出会ったのが、2016年8月末日に閉園することが決まっていた「上野こども遊園地\*」。12月、閉園を受け、遊園地を舞台にしたアートプロジェクトについて考える1DAYイベント「プレイパーク・パーティーを考える日」を開催しました。

### 実施概要

#### 「プレイパーク・パーティーを考える日」

日時 | 2016年12月23日(金・祝) 13:30~16:30

会場 | 3331 Arts Chiyoda アーツカウンシル東京ROOM302

参加アーティスト | 滝沢達史

Nadegata Instant Party (中崎透+山城大督+野田智子) ※企画協力  
<https://www.facebook.com/playparkparty>

#### タイムスケジュール

13:00 開場

13:30 開演  
 イントロダクション: 遠山尚江(受講生)

14:00 映像作品『東京ばれ(予告編)』上映: 柳堀裕太(受講生)

14:10 プレゼンテーション: 滝沢達史

14:50 休憩

15:00 アートミーティング  
 登壇者 | 森司、滝沢達史、  
 Nadegata Instant Party、+ 受講生  
 ファシリテーター | 橋本誠

16:30 ご挨拶: 嘉原妙

17:00 終演



### 遊園地を別のかたちで引き継ぐ試み

会場には、遊園地から譲り受けた遊具のネジや設計図、看板、メリーゴーランドの巨大なテント、年表などを展示。空間全体を包むように天井からカラフルなテントを吊り下げ、遊園地のような雰囲気をつくりました。いずれも遊園地で実際に使われていたものを滝沢氏と受講生が丁寧に拭き掃除をして、Nadegata Instant Party (NIP) 中崎氏の協力を得て設置したものでした。

仮設壁で構成した展示コーナーの一角には、閉園時に掲出された「閉園のお知らせ」と1962年と1984年に撮影された遊園地の写真、開園から閉園、そして東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年までの出来事を記した年表、受講生が書きとめてきた「西村真一さんとの対話日記」、遊園地の閉園時や解体の様子をまとめた映像を展示し、遊園地がどのような場所だったのかを事実に基づいて伝えました。

イベント前半では、受講生によるこれまでの経緯をまとめたイントロダクション、受講生が知人のカメラマンの協力を得なが

ら制作した映像作品『東京ばれ(予告編)』を上映。そして、これまでのリサーチや試行錯誤を経て、滝沢氏から、プロジェクトプランのプレゼンテーションを行いました。

イベント後半のアートミーティングでは、対話編コーディネーターのNIPと、「思考と技術と対話の学校」校長・森も交えたトークを行いました。

滝沢氏は、上野動物園に象を迎え入れるきっかけとなった「台東区子供議会」の活動を参考に、子供の爆発的な力を借りてプロジェクトや東京の今後を考える「東京子供議会」のプランを提案。これに対して、「子供の力を借りるのはおもしろい」など会場からも様々な意見が飛び出しヒートアップ。

一方受講生からは、アートプロジェクトからアーティストがいなくなった後どうするかという視点から「アーティスト不在のアートプロジェクト」についての投げかけがあり「アートプロジェクトにおける強度とは何か」が話題の中心に。

参加者からの質問も交え、今後のプロジェクト展開についても言及され、盛会となった3時間半でした[橋本]。



\*東京・上野恩賜公園内の上野動物園表門付近に位置していた「上野こども遊園地」。1946年に「こどもたちに夢を」という想いから、西村鷹之丞氏が開園し、その後は孫の西村真一氏が運営。乗り物は1回100円からで、休日には多くの親子で賑わっていた。

## 受講生インタビュー

「思考と対話と技術の学校」には、学生や会社員、すでにアートプロジェクトに参加している方など、様々な立場の方が受講していました。「学校」を通しての気づきや想いなど、受講生たちの声をご紹介します。

### 思考編

どの方も相手と向き合う「対話」の重要性を語ってらっしゃいましたから。

私は演劇の制作をしているのですが、近年地域やお客さんとの関係性を考える傾向が高まっていて、アートマネジメント的な制作の技術を身につけたいと思い参加しました。ほかの受講生は社会人ばかり。毎日成果を上げるために生きている人たちなので、初めは使う言語が違って戸惑うこともありましたが、講義後に「アートって何なんだろう?」と話合ううちに、いつの間にか気にならなくなっていました。結局、それらの答えは出ていません。でも最終日

の懇親会で「一人ひとりが生きるために、なくてはならない切実な問い」という言葉をもらって、すとんと腑に落ちた気がしました。これまで受けた講義は、どの方も相手と向き合う「対話」の重要性を語ってらっしゃいましたから。演劇は一度に多数のお客さんを相手にするし、社会的な事柄を扱うことも多いので、「たった一人の切実さ」は忘れがちです。これからも演劇を続けていくために、大切な視点をもらったと思っています。

経済的に豊かであっても、それだけでは幸せとは言えないんだと思うようになりましたね。

私は福島県いわき市出身で、東日本大震災のときに実家が全壊しました。それから故郷に何かしたいという気持ちがあり、コミュニティ・デザインについて学んでいたところアートプロジェクトに出会い、参加を決めました。講義では新しい見方をいくつも学びました。アートプロジェクトは、ビジネスの現場とは違い、経済的な効率性だけを優先していません。経済的に豊かであっても、それだけでは幸せとは言えないんだな

と思うようになりましたね。現場のことが知りたくて、秋から「TERATOTERA」のスタッフになり、いまでは有休を使って手伝うまでになっています(笑)。今年は、知識や経験をつけたいと思ってやってきましたが、来年は実際に事務局として運営に携わりたいと思っています。考えているだけでは意味がない。これまでやってきたビジネスの経験をアートプロジェクトに活かしたいと思っています。

### 技術編

まったく考えもしないアイデアが生まれるおもしろさがありました。

私はパブリックアートのポータルサイト「@art」を運営しています。このプロジェクトをより育てていきたいと思い、今回参加しました。技術編は、グループディスカッションが中心です。立場も年齢も異なるので、たいへんなこともありましたが、まったく考えもしないアイデアが生まれるおもしろさがありました。みんな社会人なので、役割分担や広報戦略などを考えるのは得意。でも、肝心のアーティストが想像力だけではなかなか決めきれなくて、苦労しました。

そこで実際にアーティストと関わりたいと思い、「きむらとしろうじんじんの野点(のだて) in 山谷」を手伝いました。地元のおじさんや美大生、年配の常連さんなど、様々な人と同じ時間を共有することができて、アートプロジェクトの手触りが変わる貴重な経験でした。これからもリアルな体験を通して、日常を新たに捉え直す経験をいかにつくるかを考えていきたいと思えます。

## 01

かんべ  
神戸みなみさん  
大学生



## 02

佐藤卓也さん  
エンジニア



## 03

平田健志さん  
IT企業  
新規事業企画



こうした日々の学びを、進行形で活動に活かすサイクルができたのはよかったです。

私は、現在「中之条ビエンナーレ」のスタッフとして、記録や広報、作品のインストールなどを手伝っているのですが、もともとはWEBをデザインしたことがきっかけなんです。「アート」に出会ったのもそれが初めて。なので、もっとほかの地域の事例や実践的なスキルを学びたいと思い、参加しました。技術編は、毎回その日の講義テーマに沿った演習があるのですが、西村佳哲さんの「きく力」のワークは印象的でした。2人1組になって、視線をそらす、

話の腰を折る、相槌を打つなど、聴く側の態度を設定して、双方に及ぼす影響を体験するものです。自分は聴き上手なほうだと思っていたのですが、まったく人の話が聴けていないことに気づきました。こうした日々の学びを、進行形で活動に活かすサイクルができたのはよかったです。これからは、講義で身につけた視点から、まだできていない活動を自分なりに提案していきたいと思っています。

### 対話編

アーティストのフラットなまなざしや、行動が自分を表現しているという態度に刺激を受けました。

私は以前税理士法人に勤務していたのですが、もともとアートが好きで、昨年転職をして、現在は事務局の仕事をしています。2016年に閉園した上野ことも遊園地を舞台にしたアートイベントでは、オーナーや解体業者の方などとの交渉を担いました。外部と関わることで改めて社会的な意義を問うきっかけになったものの、遊園地がなくなることに對する立場を突きつけられたり、自分たちのやっていることがお節介りなのではな

いかと悩んだり、何度も壁にぶち当たりました。しかし話し合いのなかで、アーティストの滝沢達史さんから「白黒つけずに、平行するふたつのごとを横に突き刺すのがアートプロジェクトの可能性だ」という言葉をもらい、続ける原動力になりました。アーティストのフラットなまなざしや、行動が自分を表現しているという態度に刺激を受けました。失敗してもいいからやってみたいことができたことは、私にとって大きな変化です。

これからもアートプロジェクトの現場に身を置きたいと思い、春に転職をする予定です。

私はいつかアートの業界で働きたいと思っているのですが、なかなか踏み切りがつかず、もう1年学ぶために受講しました。仕事は、予算や納期などがあるので、自ずとできることの範囲が決まっていきますが、今回制約はゼロ。なので、何を基準にどのように決めるか、判断がとても難しかったです。対話編はアーティストとのやりとりが実際にあるのですが、中間報告で山城さんが「全然おもしろくない」と仰られて、イベント直前に滝沢さんに「僕はや

る気が非常に落ちています」と言わせてしまう出来事がありました。滝沢さんの場合は、進行管理など事務的なことに意識が行きすぎて、私たちの熱意が感じられなかったのが原因のひとつ。期日ばかりに捉われず、おもしろいことを探求するアーティストの姿勢に何度もはっとさせられました。しかもそれが、人間が生きる意味や、社会に何が必要かということと結びついているんですね。これからもアートプロジェクトの現場に身を置きたいと思い、春に転職をする予定です。

## 04

西形美穂さん  
フリーランスデザイナー/  
中之条ビエンナーレスタッフ



## 05

天羽絵莉子さん  
NPO法人Art's Embrace  
事務局



## 06

田村悠貴さん  
広告制作会社 ディレクター



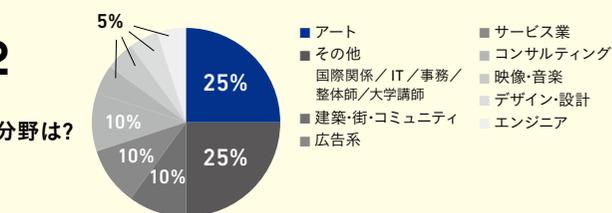
### 数字で見る受講生データ(2016年度)

受講生数  
**52**名  
うち修了人数  
思考編:31名  
技術編:8名  
対話編:7名  
合計:46名

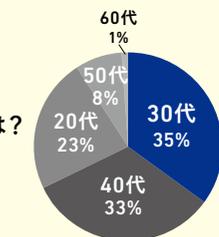
#### Q1 属性は?



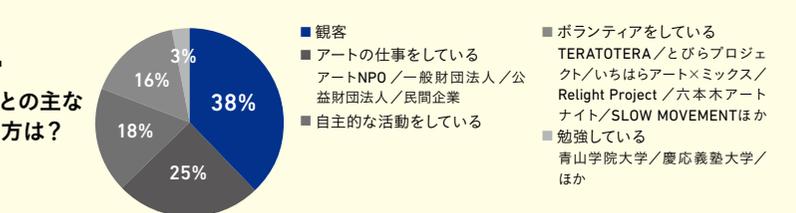
#### Q2 主な専門分野は?



#### Q3 年齢層は?



#### Q4 アートとの主な関わり方は?



## 3年間の学びを終えて

### 出発点からの距離

思考と技術と対話の学校は、アートプロジェクトの現場の人材不足に対応するための人材育成事業として2014年に始動。「基礎プログラム」のカリキュラムは、アーツカウンシル東京「東京アートポイント計画」を展開するアートNPOが向き合う課題などを踏まえながら構想しました。特に、日々の業務に追われる多くの運営の担い手たちが、思考を深め、技術を磨き、丁寧な対話を重ねる時間を十分に確保し難い状況を前に、「学校」という場を設定することにより、それらの人々が現場から少し距離を置き、未来に向けて、語り合える余白のような時間がつくれたらという考えが出発点になっています。

3年間にわたる「基礎プログラム」の展開において目指したことは3つ。これからの時代に求められるアートプロジェクトを構想し、かたちにする人材の育成をすること。アートプロジェクト運営の担い手の仕事の領域を捉え、職能を価値化すること。そして、多様な人々が出会い、異なる価値観を受け入れながら、学び合う環境を生み出すことです。

受講生は、「思考編」で、既存の枠組みに収まらない活動や革新的な挑戦をするアーティストや現場の実践者たちと出会い、「技術編」で社会性を帯びたプロジェクトの構想にチームでチャレンジし、「対話編」で、アーティストの力を間近に感じながら、プロジェクトを動かすために必要なことを学びました。そして、自らの価値観が揺さぶられながらも、そこでの学びを手がかりに、これからのアートプロジェクトについて、そして自分の関わり方について考える時間を持つこととなりました。

未知の領域を切り開こうとするアートプロジェクトは、予定調和にものごとが進まないことも多々あります。それゆえ、予期せぬ出来事に直面しながらもしなやかかつ柔軟に動いていく姿勢が求められること。効率的にうまくやるのではなく、あえて時間をかけ、さまざまな人との関わりを持ちながら展開することも重要だということ。そして何よりも、わからないことをわからないままに受け入れることを学びました。つまり、わかることが大事なのではなく、わからないことと向き合うことこそが大事だという気づきです。そのようなアートプロジェクトの在りようにも触れることとなりました。

思考と技術と対話の学校が2014年に始動した際、その対象は「アートプロジェクトを動かす人」でした。「アートマネージャー」としなかったのは、アートマネジメントということばだけでは対応しきれない、幅広い領域の仕事が運営の現場には存在するように思えたからです。職域や専門性を実態に沿って示していくことで、新たな人材がアートプロジェクトの現場に参加する余地を生み出せるのではと考えました。

「基礎プログラム」を通して、運営の現場を支えるゲストの仕事を紹介し、それぞれの専門性や携えているスキルを紐解いていきました。また、Tokyo Art Research

Lab WEBサイトでは、現場に携わるゲストたちのスキルや職能を示す人材情報を紹介しています。

### 3年間で起きたこと

3年間での受講者数はのべ113名。アートプロジェクトの現場経験者だけでなく、アートプロジェクトに関わりたいという意思を持つ社会人や大学生が集いました。受講生には、積極的にアートプロジェクトの現場に足を運び、ボランティアやサポーターとして参加したり、キャリアチェンジを経てアートプロジェクトの現場に入る人も。受講生の主体的な活動として展開された「放課後プログラム」などの集いを通して、歴代の基礎プログラム受講者の横断的なネットワークが形成されつつあります。

また、授業から派生した受講生の活動として、美術家・小山田徹さんが紹介したちび火(小さいき火)を実践するチームが発足したり、対話編の実践である「プレイパーク・パーティを考える日」の活動を継続的に展開する+basics3(対話編有志によるチーム)なども動いています。

3年間の「基礎プログラム」を通して、私たちが思い描く運営の担い手像も変化していきました。アートプロジェクト運営を仕事にしていこうとする事務局志望者だけでなく、アートプロジェクトの応援団としてプロジェクトの仕掛け手と受け手の間で現場を盛り上げたり、その価値を伝えたり、関係者同士をつなげていく場づくりをするような動きが、受講生のなかでぼつぼつと見出されるようになったからです。この新たな領域への可能性は、受講生に限らず、全国のアートプロジェクトの現場にも通じる展開といえるのではないのでしょうか。アートプロジェクトへの関わり方はより多様化しています。動かすだけでなく、普及する人、つなげる人への広がりを見せています。今後はそれらの層にアプローチするようなプログラムの展開も求められるでしょう。

アートプロジェクトの現場に出向くと、基礎プログラム受講生の誰かしらには出会うような状況が生まれつつあります。非常に心強く感じるとともに、3年間で培われたこの関係性をもとに、新たなプロジェクトを仕掛けていくことができたらと、思いを巡らせています。

最後に、仕事や学業の合間をぬって熱心に授業に参加し続けてくださった受講生のみなさま、多大なるご協力をいただいた総勢120名のゲストのみなさまに心より感謝申し上げます。本書を締めくらせていただきます。

坂本有理

「思考と技術と対話の学校」総括／スクールマネージャー

# Tokyo Art Research Lab WEB

http://tarl.jp

思考と技術と対話の学校の属するTokyo Art Research Lab(TARL)のWEBサイトを、  
“アートプロジェクトを担う全ての人のための「使える」ラボ”としてリニューアルしました。



### ●最前線で活躍する人の姿が見える

TARLでは、アートプロジェクトの最前線や各種専門分野から、講師やゲストをお招きし、人材育成や研究・開発を進めています。現場で活躍する方やアートプロジェクトに必要な職能が見えるように一覧性を高め、スキルごとの検索も可能にしました。また、それぞれのプロフィールページ上で、活動領域や関連プログラムも紹介しています。

### ●専門的な資料を活用しやすく

「図書室」を新設し、思考と技術と対話の学校の講義録や、「研究・開発」の成果をアーカイブし、テーマや疑問にあわせて資料を紹介するレファレンスコーナーも併設しています。

### ●入門者にもよりわかりやすく

近年、日本各地ではアートプロジェクトや芸術祭といった新しい形態の文化事業が増加しています。これからアートプロジェクトに取り組もうという方にもわかりやすく活用していただけるよう、FAQ（よくあるご質問）ページや、ABOUTページ内の情報を充実させています。



# 図書室

教室には、これまでTARLが研究・開発した教材や、アートプロジェクトに関する書籍が1,000冊以上あります。  
その一部をご紹介します。

01



02



03



01:東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本々増補版  
森司監修/坂本有理、佐藤李青、大内伸輔、芦部玲奈、中田一会、嘉原妙、上地里佳編著/2017年  
アートNPO育成を通して蓄積された「ことば」と、2009～2016年度にわたる東京アートポイント計画の取り組みを紹介する活動記録集。

02:アートプロジェクト運営ガイドライン一運用版  
帆足亜紀編著/2013年  
アートコーディネーターによる運営ガイドライン。プロジェクト運営の全体像を、流れに沿って把握できるガイドラインマップなど、実践的なツールが揃っている。

04



05



03:働き方の育て方 アートの現場で共通認識をつくる  
菊池宏子、帆足亜紀、山内真理、若林朋子著/川村麻子編/2016年  
これまで国内外の現場を経験してきたアートコーディネーター、プランナー、コミュニティデザイナー、会計士という専門性の異なる研究会メンバーが、アートの現場における「働き方」と向き合い、2年間にわたり交わした対話の集積を言語化・ビジュアル化した一冊。

04:アート・アーカイブの便利帖  
アート&ソサエティ研究センターほか編/2016年  
プロジェクトの運営に携わるスタッフが活動の記録を整理・活用し、アーカイブするために役立つアプローチや手法を紹介。これからアーカイブに取り組もうとするときに、ポイントや手順を確認することができる入門書。



05: An Overview of Art Projects in Japan: A Society That Co-Creates with Art  
熊倉純子、長津結一郎編著/Art Translators Collective編/2015年  
日本国内のアートプロジェクトについて事例と理論を交えて網羅的に論じた『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年』のエッセンスをまとめた英訳本。この本をもとに編纂された日本語版『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990年→2012年』補遺』も2015年に発行。

\*発行は、すべて公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京(2014年度以前は東京文化発信プロジェクト室)です。



\*3つの基礎プログラムでは、2016年度もそれぞれ講義録やドキュメントを制作しました。詳しくは、TARL WEBの図書室をご覧ください。http://tarl.jp/library

## Tokyo Art Research Lab

「思考と技術と対話の学校」

### 基礎プログラムアニュアルレポート

#### 監修

森司 [アーツカウンシル東京]

#### 執筆

坂本有理、佐藤李青、嘉原妙 [アーツカウンシル東京]

阿比留ひろみ、野崎美樹、及位友美、橋本誠 [一般社団法人ノマドプロダクション]

家入健生 [アーツ前橋]

#### 編集

川村庸子

#### 編集アシスタント

和田真文 [一般社団法人ノマドプロダクション]

#### アートディレクション・デザイン

加藤賢策、奥田奈保子 [LABORATORIES]

#### 写真

加藤健、川瀬一絵、427FOTO

#### 印刷

山田写真製版所

#### 発行

アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL:03-6256-8435 FAX:03-6256-8829

URL:http://www.artscouncil-tokyo.jp

#### 発行日

平成29年3月23日

#### TARLの各プログラムについてのお問い合わせ先

TARL事務局(一般社団法人ノマドプロダクション)

e-mail:info@tarl.jp tel:080-3171-9724 fax:03-6740-1926

## Tokyo Art Research Lab (TARL)とは

アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、ともにつくりあげるリサーチ/人材育成プログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことによって、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

<http://www.tarl.jp>



